

あたり前じゃない

小瀬田小 四年 齋藤 崇生

「ここがうわさの『こけむす森』かあ。」

あせをふきながら、おじがうれしそうに言う。

「こけの緑があざやかで、きれいだね。」

写真を何まいもとりながら、おばも感動したようにつぶやいた。

夏休みに、鹿児島に住むおばとおじが屋久島に遊びに来ることになった。

「せ、かくだから、屋久島の自然をいっぱい

味わってもらいたいね。」

母と相談して、白谷雲水峡に行く計画を立てた。ぼく自身も、白谷雲水峡に行くのは久しぶりだ。

「早くおばさんたちに屋久島の森林を

見せたいな。何と云うかな。」とわくわくした。

いよいよ当日。雨がふる音で目がさめた。

「雨だねえ。ちよつと無理かな。」

心配そうに外を見るおばにぼくは

「大丈夫ですよ。」

と言った。屋久島の自然は、きっとおばたち

に力をかしてくれると思っただからだ。準備を
して、白谷雲水峽へ向かった。途中で、何か
所も工事をしていた。五月の雨のえいきょう
がのこっているんだなと思っ、少し暗い気
持ちになった。でも、目的地が近づくにつれ
て、空が明るくなり、日がさしてきた。それ
と同時に、ぼくのバも明るくなってきた。

「さあ、出発！」

目やすはこけむす^木林。いつもはどんどん歩
けど、今日はおばたちに合わせてゆっくり進
んだ。おばたちは、途中で立ち止まって

「この森のふん囲気がいいね。いやされる。
木の根がこんなに見えているんだね」

と言いなから、写真をとったり木にさわった
りしている。また、ぼくたち以外にもたくさ
んの人たちが歩いていて、それぞれ立ち止ま
って写真を撮ったり、川が流れる音や鳥のさ
えずりに耳をすましたり、ガイドさんの説明
を聞いたりしている。ぼくは、「そうか、こ
の自然はあたり前じゃないんだな」と思った。

ぼくだって、初めてこの木林を通って太鼓岩に登ったときはすごく感動したし、こけをさわったときはふかふかでびっくりした。けれど屋久島に住んで、屋久島の自然を見なれていくうちに、これがふつうだと感じるようになっていた。でも、あたり前じゃないんだ。この森や木や自然が、ずっと昔からのすがたでここにあり続けることは、本当にすばらしいことなんだ。そして、そのために、たくさんの方がぼくたちの知らないところでがんばっているんだよね。

「さあ、着いたよ。」

こけむす^{木林}に着いた。雨上がりなので、こけが雨をすってふっくらしている。

「やっぱり実物はちがうね。迫力がある。」
おはたちがうれしそうに話していた。ぼくは自分がほめられたみたいでうれしかった。

この自然がこれからもあたり前みたいになり続けるために、ぼくも何か自分にできることを見つけてがんばりたいと思った。